

待望されて久しい『スピノザ全集』が岩波書店から刊行された。日本語でスピノザを存分に読むことができる環境が整ったのである。岩波書店の「著者情報」によれば、スピノザは「アカデミズムの傍流にありながら、ヨーロッパの哲学・思想史においてつねに重要な位置を占め、独自の魅力を放ち続けて」おり、「刊行にあたって」によれば、「そして 21 世紀、〈Humanité=人類〉という長い夢が追い立てられるように覚めようとしている今、またスピノザ再接近の気配が」あり、「スピノザは自由と至福、救済を、そして神学-政治論的迷信からの解放を、「人間」からもっとも遠いところから考えた」。

ほんとうにそうなのか。そしてもしそうであれば、それはより具体的に、世界を、社会を、そして人間をどのように思考することなのだろうか。そしてその哲学的意義は何だろうか。

松田克進さんと平尾昌宏さんは、ともにこの『スピノザ全集』の訳者であり、スピノザについての第一線の研究者である。さらに、お二人とも専門を超えたより広い文脈においても、哲学的思考を展開している。「いまスピノザを読むことの意味は何か」を論じるうえで、最もふさわしいお二人と言えるだろう。お二人の対論を導きとして、われわれもあらためてスピノザ哲学に向き合い、その意義、可能性、あるいは問題性を考える機会としたい。

まえおき

今回の共同討議では、本企画の趣旨の従って、スピノザ哲学を巡り、以下の3点を取り上げて議論する。

- 1：今回の全集の意義
- 2：スピノザ哲学の特異性
- 3：決定論の倫理的含意

1：今回の全集の意義

今回の討論の大きなきっかけになったのは邦訳スピノザ全集の刊行である（2022年～、岩波書店）。共同討議者、松田、平尾の両名も訳者としてこの企画に参加している。そこで、この全集刊行の意義について、主に平尾の方から簡単に説明する。

2：スピノザ哲学の特異性

この全集の意義を根本的な意味で下支えしているのは、スピノザ哲学が現代に対して持つ意味である。第二にこの点を取り上げたい。

全集刊行の少し前に刊行された、國分功一郎氏のスピノザに関する二冊の新書、一般読者にとっては影響の大きいこれらの本には、〈スピノザ哲学はデカルトに始まる近代哲学とは、コンピュータで言うところの「OS」が違う〉という面白い比喩が登場する。こうした見方は、今回の全集のうたい文句に入っている、「アカデミズムの傍流にありながら、ヨーロッパの哲学・思想史においてつねに重要な位置を占め、独自の魅力を放ち続け」という言葉とも響き合うであろうし、この点こそ、スピノザ哲学が持つ現代性に関わるだろうと思われる。そこで、もしスピノザがこのように近代において特異な哲学を展開したのだとすれば、その所以はどこにあるのかを考えたい。

その際に参考になるのは、共同討議者、松田氏の『スピノザ学基礎論』（勁草書房、2023年）である。方法的な意識が非常に鮮明な本書では、スピノザ哲学の骨格を描き出しながら、同時にスピノザ哲学の特異性を浮かび上がらせることになっていると思われるからである。

3：決定論の倫理的含意

スピノザの哲学は、その主著のタイトルが示す通り、「倫理学」に他ならなかった。しかし、スピノザ哲学の基本には決定論があるとされる。では、この決定論哲学と倫理学とは

どのように整合するか、この点を考えておきたい。

これはスピノザ哲学の理解に関わるとともに、広く、「自由意志を前提とした倫理学」のオルタナティブの可能性について、あるいはこの討論の趣旨文にある言葉と関連させれば、いわば「ポスト・ヒューマンの倫理学」とでもいうべきものを考えることになるだろう。

だが、ここでは議論が散漫になるのを避けるため、「決定論者はなぜ人に感謝できるのか」(『アルケー』2010年)という松田氏の問題提起を一つの手がかりとしたい。

スピノザ再考——〈決定論を生きる〉ことは（どの程度）可能か？

松田克進（龍谷大学）

平尾昌宏氏の共同討議要旨に対応させる形で書く。

1：今回の全集の意義

この点は平尾氏の説明に基本お任せしたいが、平松希伊子氏と私が共に担当した、全集第1巻の『デカルトの哲学原理』本文（とりわけその前半）については、私が訳者解説執筆のさいに特に意識したことを中心に共同討議でお話しするつもりである。

2：スピノザ哲学の特異性

國分功一郎氏の〈スピノザ哲学はデカルトに始まる近代哲学とは、コンピュータで言うところの「OS」が違う〉という趣旨の指摘は的確である。では、この〈スピノザ的OS〉とは何か。鍵は主観性(subjectivity)の不在である。ここで「主観性」というのは、近代哲学の主要な特徴のひとつである〈認識全般に対する批判的スタンス〉のことである。その典型は、デカルトの懐疑やフッサールのエポケーであり、カントの批判もこのスタンスに属するであろう。スピノザ的OSはこのような主観性を含んでいない。いわば主観性との互換性がないのである。

OSのこのような特異性は次のような重大な帰結をもたらす。すなわち、多くの〈大哲学者〉たちが苦闘してきたソリプシズムの問題が、スピノザ哲学には全く現れないのである。このことが果たして哲学的に悦ばしいことなのか否か。——見方は分かれ得よう。私自身、判断が迷うところである（共同討議で平尾氏のお考えを聞いてみたい気もする）。いずれにせよ、スピノザの関心はソリプシズムの克服にはない。では、彼の最大の関心はどこに向いているのか。——それは、決定論といかに正対するかという点に集中する。

3：決定論の倫理的含意

スピノザは哲学史における代表的かつ徹底的な決定論者である（その徹底性は、現実世界を唯一の可能世界と捉える必然主義に存する）。そして、彼の主著『エチカ』の後半は、一言で言えば、決定論とどう向き合うのかという問題の徹底的な追及である。例えば『エ

チカ』第4部の付録（残念ながら一般に読まれることは少ないようである）は、決定論者の「正しい生活法」を縷々32項目にわたって指し示す。それは、ペレブーム流に言えば〈自由意志なしの生き方(way of living without free will)〉の提示なのである。

しかし、決定論という思想は、地動説や進化論がかつてそうであったのと同様に、〈強い痛みを伴う思想〉である。決定論は、我々の対人感情（典型的には感謝や憤り）の可能性を激しく揺さぶるのである。そして、スピノザ自身、〈自由意志なしの生き方〉を徹底することが「稀にして困難」であることを認めているのである。——それでは、〈自由意志なしの生き方〉を（困難とはいえども）可能な生き方として提示するという『エチカ』の試みは、どの程度まで成功しているのであろうか。共同討議で大いに議論してみたい。